

## 【書評】

小松祐子・ Gilles Delmaire 著『フランコフォニーへの旅』

駿河台出版社、2009 年

Sachiko Komatsu et Gilles Delmaire, *Destination Francophonie*,  
Surugadai-shuppansha, 2009.

鳥羽美鈴

TOBA Misuzu

本書の特徴のひとつは、著者も触れているように「フランコフォニー（フランス語圏）」というテーマを扱っている点であるが、同テーマを扱うフランス語学習教材には、既にジャン＝ルイ・ジュヴェール（Jean-Louis Jouvert）（著）三浦信孝・西山教行（編）『ラ・フランコフォニー（*La Francophonie*）』（1999、第三書房）がある。しかし、本書の構成は、それとは大きく異なり、各課には会話文とフランス語圏の各地域を紹介する説明文（読み物）に加えて、様々な詩歌が掲載されている。また、発音・冠詞から接続法に至る文法事項の解説と練習問題が、巻末も含めると実に多く用意されているのが分かる。語学教材としてはおそらく平均的な約 80 ページという厚さでありながら、その内容たるや多彩である。ページを改めて繰ってみると、あたかも 1 冊の初級文法教材に、中級の学習者向けの読み物数冊を加えたような濃密さを感じる。

また、本書を手にとって表紙を 1 枚繰れば、著者がこれまでのフランス語学習教材と如何にして差別化を図ろうとしているかが自ずと明らかになる。これまでに出版されてきた数々のフランス語学習教材では、フランス本土（l'Hexagone）を示す文字通り 6 角形の大きな図やパリ市内の地図が裏表紙を占拠していたが、学習者が本書で目にするようになるのは、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、オセアニアの 5 大陸にフランス語圏が広がっていることを示す世界地図である。

第 1 課から順に、読み物のフランス語タイトルを仮訳していくと次のようである。「世界のフランコフォン（第 1 課）」、「フランスの諸言語（第 2 課）」、「ヨーロッパのフランス語（第 3 課）」、「北米のフランス語（第 4 課）」、「カリブ諸島のフランス語（第 5 課）」、「マグレブのフランス語（第 6

課)」、「ブラックアフリカのフランス語 (第7課)」、「東南アジアのフランス語 (第8課)」、「太平洋のフランス語 (第9課)」、「フランコフォニー諸機関 (第10課)」。これらのタイトルが示唆するように、フランスで話されている言語はフランス語のみではなく、ブルトン語、アルザス語やコルシカ語などの地域語があること、また、パリとは異なる形で話されるフランス語がフランス国内のマルセイユをはじめ、アフリカ諸国や北米などフランス国外に存在すること、こうした事実を本書が明確に伝えている点を高く評価したい。

一方、本書で大いに悔やまれる点は、添付の CD 教材において、標準フランス語以外の音声期待に反して一切聞かれなかったことである。本書の会話文には、ラファエル (Raphaël) という少年が、「僕はマルチニックのフランス人です」と自己紹介する場面や、フランスに暮らす6歳の少年、モハメッド (Mohamed) がアルジェリア出身の父親から移民1世の苦労話を聞くといった場面が用意されている。それであればなおのこと、もっと多様なフランス語の音声を収録し、耳から差異に慣れさせる機会を提供しても良かったのではないだろうか。これをもって、パリで話されるフランス語とて、ひとつの変種に過ぎないこと、多様なフランス語間に優劣の差など存在しないことを学習者によりよく理解させることが可能になったのではないかと考える。

各地域において多言語が共存している実態に積極的に言及したり、諸国の言語法や言語教育の話題を取り上げたりするという試みは、語学教材としては目新しい。さらに、ベルギー生まれの歌手、ジャック・ブレル (Jacques Brel)、ベルギー・ビール、モントリオール出身のセリーヌ・ディオーン (Céline Dion) からズーク (Zouk) といわれるアンティル諸島の大衆音楽まで登場し、従来のフランス語テキストがエッフェル塔に代表されるフランスの建造物や歴史、文化などを専ら取り上げてきたのとは明らかに趣を異にする。

そもそも我が国のフランス語に関わる研究は、これまでフランス共和国に偏りすぎてきたきらいがある。そして、フランコフォニーといえ、多くの人々は今なおフランスが中心にあって、この共同体を率いているものと理解している。しかし、今日のフランコフォニーは複数の中核をもち、フランスの中心性はさほど確固としたものではない。

残念ながら一般の認知度は依然として高いとはいえないが、2003年3月にフランコフォニー国際組織の設立を記念して始まり、それ以降、ケベック、

カナダ、フランス、ハイチ、カメルーンなどの大使館や東京日仏学院、日仏会館の助成と協力を得て、我が国で例年開催されているフランコフォニー・フェスティバルがある。ここでは、フランコフォニー諸地域の郷土料理や文芸作品などを通してフランコフォニーの多様性を実感できる。2010年3月にフランスで開催されていた同フェスティバルにおいては、アフリカの音楽演奏等、同様に魅力あるプログラムが数多く並ぶなか、とりわけケベック出身の若者による語りと演奏のパフォーマンスが印象的であった。彼は、標準フランス語とは異なるものとして嘲笑の的となることの多いケベックのフランス語をむしろ前面に打ち出すことで会場を心地よい笑いの渦につつまこむとともに、この言語なくしては成しえないと思わせるほど言語そのものの魅力を伝えることに見事に成功していた。

かつて、フランコフォニー国際組織事務総長2代目のアブドゥ・ジュフ (Abdou Diouf) は次のように詳述した。やや長いが引用しよう。「フランコフォニー共同体の諸国が特に注意を払わなければならない価値観は、文化的多様性である。我々は均質化した世界を望みはしない。だからといってグローバル化に反対するわけではないが、サンゴールがたゆまず説いてきたような連帯した世界、諸文化間の対話が可能であるような世界を望む。この対話が存在し、実りあるものとするためには、互いの差異によって豊かになるような強固で革新的な文化的多様性が必要である。文化的多様性の第一形態は諸言語のあり方である。諸言語の多様性といっても、まずは一言語における多様性である。不変の辞書に固定された唯一のフランス語など存在しない。ケベックのフランス語は正確にはセネガルのフランス語と異なるし、セネガルのフランス語はフランスのものとは異なる。フランスにおいてさえ、プロヴァンスのフランス語とパリのフランス語は同じではない。(中略) 言語というものは生きているのであり、それを残さなければならない」(Libération, 25 mars 2004)。

評者の知人のひとりに、フランス語と英語のバイリンガル話者であると自負していたにもかかわらず、フランス語教員としても英語教員としても雇用してもらえずに失意のうちに日本を去っていったケベック出身者がいる。他方、フィリピン人はときに人件費の安価な英語教員として歓迎されている。しかし、経済的利益からではなく、アブドゥ・ジュフも再三言及している「文化的多様性」というものこそが社会を豊かにするという観点から彼らの存在意義を見出し、差異を進んで受け入れるような社会であって欲しい。

フランコフォニーへの旅。それはフランス語というひとつの言語を契機に、世界の文化的・言語的多様性を見出す旅であると同時に、今日的な課題に対処するために国境や大陸を越えて人々と手を携えようという心を育む旅でもあると考える。本書が、フランス語はフランスの言語である、という観念に縛られている多くの人々をフランコフォニーへと誘ってくれることを強く願う。

(とば みすず 横浜国立大学非常勤講師)